

勤務医コラム

「私、失敗しないので」
外科医ドクターX・・・の
ようになれば阿知須共立病院 外科
工 藤 明 敏

フリーランス外科医・大門未知子がテレビを賑わせている。大門が美人女優の米倉涼子だけに、男どもは少なからず関心を抱く。彼女は医師としての能力は極めて高く、患者の周辺状況などから事前に容体の変化などを想定する洞察力も併せ持つ。オペする度に「私、失敗しないので」とたびたび宣言しているが、「医療ミスは絶対に起こさない覚悟でオペをする」ということのようなのだ。

たまたまチャンネルを変えたらその場面に遭遇したが、話の流れ自体は現実離れしている。われわれ臨床外科医はもちろん「医療ミスは起こさない」覚悟で、毎回手術を行っている。難易度の高い手術をすればするほど、手術中のトラブルだけではなく、術後合併症に注意が必要となる。医療は不確定性に満ちており、突発的に予期せぬ出来事が起きる。しかしその突発的に起きる出来事は想定内でなくてはならない。

私は外科医であるので、手術をすることが仕事である。もうすぐ還暦を迎えるが、毎週手術室に入る環境に身を置くことができることに感謝する次第である。私が卒業した（昭和56年）頃、外科は花形の診療科であったけれども、今はかっこわるいことが多いようだ。ちょっとで

も合併症を起こしてしまうと、たちまち患者さんや家族から白い目で見られる。外科医も自分の身を守る必要があるので、リスクの高い手術は自然と避ける傾向にある。これは一見とても残念なようだが当然であって、なかなかドクターX大門未知子のようにはいかない。以前は「先生に命あずけた」という人が多く、インフォームド Consent もない時代で、がんという病名を伏せて手術を行い、肝臓の薬ですと説明して抗がん剤を投与していた。また術前には縫合不全についても触れず、再手術の可能性もあるとは一言も言及しなかった。今はすぐ外科医の責任が問われ、訴訟になる可能性があるばかりでなく、このような危険で困難な手術はすべきでない、医療安全委員会の外部委員から外科医失格のようなコメントが付く次第である。外科はいつの間にかKが多く付く診療科になってしまった。

患者さんへの最高の医療を提供するとはどういうことであろうか。知識が豊富で最新の外科治療を提供できることは最低限必要であろう。手術を行うということは、術後合併症に対する迅速な処置が行えるということである。つまり夜間休日でも緊急的な処置や手術ができるということでもある。これは自分自身だけでなく、コメディカルスタッフもそれに対応してくれる事が必須である。しかし現実的には完璧を求めることは困難である。大病院であれば、指導医としての立場で遠くから患者を診る（口で指導する）こともできようが、私の病院では未だに術者としての役割が回ってくる。もちろん後輩の手が止まったり、重要な局面となった場合にその場を乗り切るには指導医としての力が発揮出来るかにかかってくる。後輩の治療や手術を辛抱強く見守ることができるかということも指導医としての力量である。そのためには最新の知識が必要で、常に「経験だけで手術を行ったり指導したりしていないか」を自分に問わなければならない。つまりEBM（Evidence-based medicine、科学的根拠）に基づいているかである。具体的には①外科関連の研究会・学会に出

席する、②学術書を読む、③手術前日は必ず手術書に目を通す、④学会から発信されるビデオを見るなどを自分に課している。

最近の手術の傾向として、内視鏡外科手術を多用している。小さい創から器具を挿入して手術をしているわけだが、もちろん手と同じようにはいかず、また器具を目的のところに持つて行くのに少し制限がある。自分の調整視力は年々衰えてゆくが、この内視鏡外科手術はモニター映像で確認するため、拡大視効果は抜群であり、返って外科医としての寿命が延長した感がある。

私は肺動脈や腸骨静脈を損傷し大出血を経験している。ほとんどの外科医は予期せぬ大出血を経験していると思う。しかし私はラッキーなことに何とかその場をクリアすることができた。外科医の資質というのは手先の器用さ（器用なのに越したことはないが）ではなく、不測の事態を安全に乗り切る冷静さというか頭の切

り替えが大事で、思い込みで先に進まないことである。

外科の医療崩壊が話題になって久しい。Kが多い科ではあるが、手術がうまくいったときの充実感は何物にも代え難い。実際に自分の手で患者さんの癌を取りだして、うまくいけば治癒させることができる。多くの若い人たちが外科の門をたたいてくれることを希望してやまない。山口県には外科講座が二つあるが、今こそ外科が山口県として一つになって外科の魅力を多くの医学生に知ってほしい。そのためには既得権益を手放す勇気が必要だ。将来外科講座が一つの大講座となり良い医療をめざすようになることが私の夢である。

メスを持つ勤務医としての外科医の寿命はいつまでであろうか、命題として自分に問う毎日である。術前に「私、失敗しないので」と手洗いをしながらつぶやいている。

